

由井 浩

タラヨウ < はがきの木 >

ある郵便局の敷地の中に一本の木があり、その脇に“この木はタラヨウと呼ばれる郵便局のシンボルツリーです”との説明板が立っていた。葉の裏に先の尖ったもので字を書くとその跡が黒く残るので、古代インドで手紙や文書を書くのに用いた多羅樹の葉になぞらえてその名が付けられ、「はがきの木」とも呼ばれていることも説明されていた。

落ちていた葉を拾ってきて葉の裏に字を書いてみようと思ったが、落ちていた葉が無かったので未練を残しながらこの木から離れた。



タラヨウ（郵便局のシンボルツリー）



タラヨウの説明板

説明板に書かれているタラヨウと多羅樹との関係がよくわからなかったので、インターネットで調べてみた。

紀元前5世紀頃のインドで、原始仏教のブッタの教えを文字に記して残すことになった時に選ばれたのが多羅樹の葉だった。多羅樹は葉が大きくて丈夫なヤシ科の植物で、葉に針のようなもので傷をつけるようにして文字を刻み、そこへ油に墨を混ぜた液体を擦り込み、余分な箇所を拭き取ることで、はっきりと文字を残すことができた。

日本には多羅樹は生えていなかったが、その代わりに葉の裏に文字が書ける面白い樹があった。この樹の葉の裏側は多羅樹のように傷をつけた部分に墨を擦り込むわけではなく、傷をつけた部分が黒く変色して文字がはっきり識別できるようになる性質を持っている。この樹はモチノキ科の平凡な常緑樹だが、多羅樹のような樹という意味を込めてタラヨウ（多羅葉）と名付けられた。

日本で1871（明治4）年に郵便事業を開始して“郵便の父”と称された前島密は、当時ヨーロッパで始まっていたポストカードのシステムを日本に導入するに当たり、タラヨウ

の葉にヒントを得てポストカードに「葉書」と命名して1873（明治6）年に日本初の郵便はがきを発行した。

今年の5月に東京・調布市にある神代植物公園にバラの花を見に行った時に、バラ園の近くでタラヨウの木を見つけた。葉が何枚か落ちていたので、その中の1枚を拾ってきた。



神代植物公園のタラヨウ



タラヨウの落ち葉
（長径：約15cm）

帰宅後早速葉の裏側に先端が尖った金属製の調理用具で字を書いてみた。書いてから1分も経たない間に書いた字が黒ずんできてよく読めるようになった。



タラヨウの葉の裏側に書いた字（上部）

<下部にある漫画様のものは葉に付いていた傷が成長したものと>

字を書いた葉を眺めながら、明治初期に古代へのロマンを込めてポストカードに「葉書」と名付けた前島密の余裕ある発想に感心した。奇しくも今年は前島密の没後100周年に当たり、それを記念したフレーム切手セットがこの春に販売されたとの情報を得て近くの郵便局に買いに行った。しかし、この切手セットは故人にゆかりのある神奈川県と新潟県の一部の地域のみでの限定販売で、もう完売してしまったとのことだった。代わりに今でも肖像が使われている1円切手を買って、それを見ながら前島密の偉業に思いを馳せることにした。



前島密の肖像が使われている
1円切手